



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

嵐牛俳諧資料館

らんぎゅう
掛川の俳人・柿園嵐牛が伝えた
俳諧資料 デジタル公開へ

国文研が嵐牛俳諧資料館（静岡県掛川市）と覚書締結

概要

国文学研究資料館（以下、「国文研」）では、らんぎゅう嵐牛俳諧資料館と覚書を締結し、同館が所蔵する古典籍（江戸時代以前の本）をデジタル化し、WEB上での一般公開を進めてまいります。

現在、嵐牛俳諧資料館所蔵の貴重な俳諧関係の古典籍のうち45点を、国文研の「新日本古典籍総合データベース」で公開しておりますのでお知らせいたします。

嵐牛俳諧資料館（静岡県掛川市）は、柿園嵐牛の子孫・伊藤鋼一郎氏がその生家の蔵を改装し開いた私設の資料館です。柿園嵐牛（1798～1876）は掛川市八坂に生まれ、農業と鍛冶のかたわら芭蕉の流れを汲む鶴田卓池に俳諧を学び、多くの門人を輩出しました。栩木夷白とならび遠江の二大俳人といわれ、各地に句碑がのこされています。

嵐牛俳諧資料館では俳諧・和歌・国学に関する資料を収蔵しています。俳諧研究者の加藤定彦氏・倉島利仁氏の尽力により資料調査が進められ、その成果は『柿園嵐牛俳諧資料集』としてまとめられました。

国文研は平成27年度からの資料調査を経て、平成30年度より古典籍の撮影を開始し、『春の日』『枯尾花』『鶉衣』等の貴重な俳諧資料をデジタル化しました。今後も継続してデジタル化を行い「新日本古典籍総合データベース」より順次公開予定です。

公開された画像は、インターネット経由で、いつでもどなたでもご覧いただけます。ぜひご活用ください。

- 公開年月日：2019年10月23日（水）・2020年1月21日（火）
- 公開数：45点（作品数）・2,876コマ（画像ファイル数）
- 公開サイト：新日本古典籍総合データベース：<https://kotenseki.nijl.ac.jp>

嵐牛俳諧資料館所蔵の公開作品リストはこちら▼
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/list-rngy.html>

- 利用条件：クリエイティブ・コモンズ 表示 – 継承 4.0 国際 (CC BY-SA 4.0)
<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja>
クレジット表示をすることにより、自由にお使いいただけます。
ご利用の際には、以下のようなクレジット表示をお願いします。
(例) 撮影：国文研／所蔵：嵐牛俳諧資料館

本件に関するお問い合わせ先

国文学研究資料館 古典籍共同研究事業センター
事務室 管理係
E-mail: cijinfo@nijl.ac.jp
TEL: 050-5533-2988 / FAX: 042-526-8883
<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>

らんぎゅう

嵐牛俳諧資料館

E-mail: takumise@titan.ocn.ne.jp
TEL:(0537)27-0392 / FAX :(0537)27-0440
<https://rangyu.takumise.net/wp/>

■ 共同プレスリリース ■

嵐牛俳諧資料館および国文学研究資料館のご紹介

嵐牛俳諧資料館

らんぎゅう

嵐牛俳諧資料館

嵐牛俳諧資料館（静岡県掛川市）は、江戸後期に遠江で活躍した俳人・柿園嵐牛の遺した資料を収蔵・展示している資料館です。

嵐牛の子孫である伊藤鋼一郎氏が江戸時代の蔵を改装し、嵐牛蔵美術館として公開を開始、2017年に嵐牛俳諧資料館と名称を変更しました。主な収蔵品は、俳諧・和歌・国学に関する資料です。とくに俳諧関係は版本が約300点、そのうち100点ほどは嵐牛が俳諧を志した文政以前の蕉風俳書コレクションとして特徴づけられます。

ホームページにて常設展示・企画展示の様子を公開しています。

【嵐牛俳諧資料館 ホームページ】

<https://rangyu.takumise.net/wp/>

【柿園嵐牛俳諧資料集】

<https://rangyu.takumise.net/rangyu.book.files/rangyu.book.pdf>



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館

国文学研究資料館は、国内各地の日本文学とその関連資料を大規模に集積し、日本文学をはじめとする様々な分野の研究者の利用に供するとともに、それらに基づく先進的な共同研究を推進する日本文学の基盤的な総合研究機関です。

平成26（2014）年度からは、人文系では初の大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」がスタートしており、国文研が中心となって国内外の大学等と連携し、日本語の歴史的典籍のデジタル化と、国際共同研究ネットワークの構築を推進しています。

【国文学研究資料館 ホームページ】

<https://www.nijl.ac.jp/>

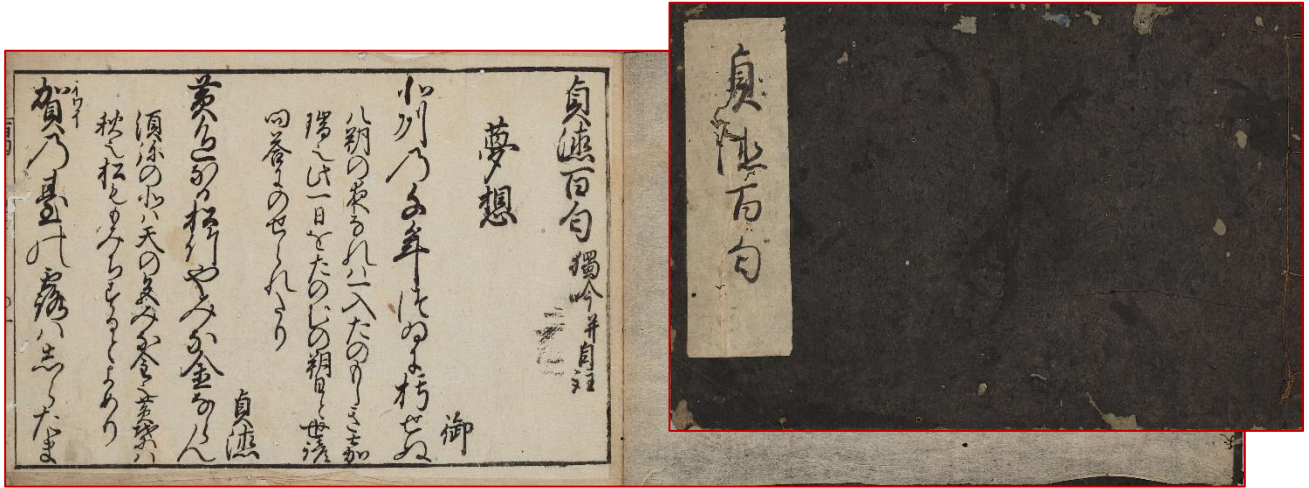
【日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画】

<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>

今回公開された資料のいくつかをご紹介します。
【俳諧関係資料】

貞徳著『貞徳百句/独吟并自註』1冊（万治2年）

（ていとく）（ていとくひやくいんどくぎんならびにしちゅう）

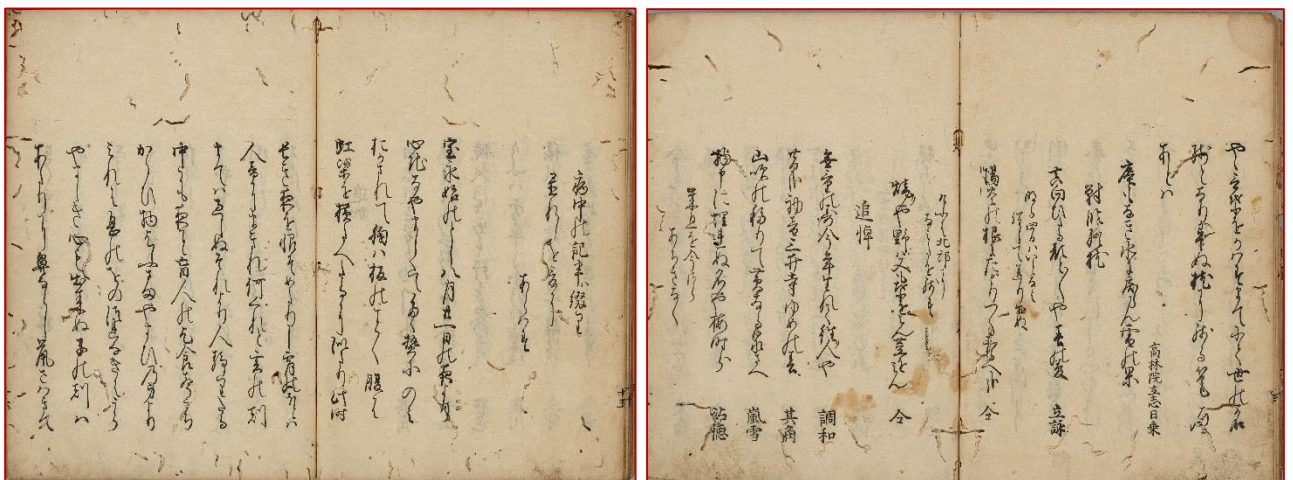


松永貞徳は江戸初期の俳人で、俳諧を連歌から独立した文芸として確立させ、貞門俳諧の祖となった。正保年間(1644～1648)の8月1日夜、夢の中で「北州の千年つみに朽せぬ」という句を得た貞徳は、「黄色なる松竹やみな金ならん」の脇を付け、独吟百韻を巻いた。自注では用語や句の付け方について簡潔に記し、若い門人に範を示した。貞徳没後7回忌の万治2年(1659)に出版された。

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100292070>

立詠編『立志終焉記』1冊（宝永2年）

（りゅうえい）（りゅうししゅうえんぎ）



二世立志は初代立志の次男で、二世俳園、松楽軒、和階堂と号した俳諧点者。編著に『難波の枝折』『宮古のしをり』（ともに元禄5年(1692)刊）がある。宝永元年(1704)8月下旬に体調を崩し、翌2年(1705)2月3日に48歳で没。辞世「塵もなき水に戻らん雪の果」、法名は高林院立志日乗。二世立志の没後間もなく、息子の和嘯堂立詠（のち三世立志）が終焉記を記し、門人知友の追悼吟、歌仙2巻などを加えて編集、出版した。

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100292087>